

國學院大學學術情報リポジトリ

『三体詩素隠抄』における杜牧詩：
「貴池県亭子」を中心に

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-07 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 何, 苗 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00001568

『三体詩素隠抄』における杜牧詩

—「貴池県亭子」を中心に—

The Poetry of Du Mu in *Santai Poetry Soinsho*:

Focusing on *The Pavilion in Guichi Province*

何 苗

キーワード：三体詩 注釈 杜牧 心素隠 貴池県亭子

关键词：三体诗 注释 杜牧 心本源隠 贵池县亭子

概要

『三体詩』は淳祐10年、南宋周弼が編んだ詩集である。これは唐代の詩を七言絶句、七言律詩、五言律詩の三体に限り、167人の作、494首を収める。元の時代になって、これに対する注釈が二種類作られた。いわゆる釈円至（号は天隠）注と裴庾（字は季昌）注であり、やがて両注を合併した本が二種類作られた。室町時代、日本へ伝わっていき、五山禅僧によって数多くの注を加えられた。さらに、その抄物も盛んになった。

『増註唐賢絶句三体詩法』（『三体詩素隠抄』ともいう）はその刊本の中で唯一の全巻の抄であり、（雪）心素隠が釈をつけたものである。元和八年（1622）古活字本が初刊し、寛永十四年（1637）刊本が流布している。のち大正二年（1913）活版本がある。

『三体詩』の中で杜牧の18首が一番多いが、それぞれ七言絶句16首と七言律詩2首がある。「貴池県亭子」はそれに収められた七言絶句である。

本稿では、『三体詩素隠抄』におけるその色異なっている絶句から入手し、心素隠がその「貴池県亭子」における字、語をどう解釈し、理解したかを考察し、また引用された書籍、資料を解明していき、さらに漢詩に対するオリジナルな見解があるか否かもを探ってみたい。

摘要

《三体诗》为淳祐10年南宋周弼所编诗集。其选取唐诗中的七言绝句、七言律诗、五言律诗三种体例，收编167位诗人的494首作品。至元代，释圆至（号天隠）与裴庾（字季昌）对其进行注释，其后，又出现了兼收两家注释的两种注本。至日本室町时期，传入日本，五山禅对其僧大加批注，而后《三体诗》的抄本也盛行一时。

《増註唐賢絶句三体詩法》（亦称《三体詩素隠抄》）为刊行抄本中唯一的全抄本，注释者为（雪）心素隠。元和八年（1622），古活字版初次刊行，寛永14年（1637）刊本广为流传，随后的大正2年（1913）又诞生了活字版本。

《三体诗》中共收杜牧诗18首，即七言绝句16首和七言律诗2首，数量位居榜首。

《貴池县亭子》便为收录其中的七言绝句。

本文拟从《三体诗素隠抄》的该绝句入手。首先，考察素隠如何解释、理解该诗的字、词；其次，对其援引的书籍、资料追根溯源；最后，探讨素隠对汉诗是否有独到的见解。

はじめに

『三体詩』は南宋の周弼の編、成書の時期は淳祐十年(1250)と伝えられる。これは唐代の詩を七言絶句、七言律詩、五言律詩の三体に限り、167人の作、494首を収める。原来の題は『唐賢三体詩法』といい、各体をさらに実接、虚接といった表現のスタイルによって分け、それぞれに解説がある。元の時代になって、釈円至(号は天隠)注と裴庾(字は季昌)注という二種類の注釈が作られ、やがて両注を合併した本が二種類作られた。室町時代、日本へ伝わっていき、五山禅僧によって数多くの注が加えられた。さらに、その抄ものも盛んになった。その中に、これまでに出版された抄物が江戸時代の刊本四種と、近年になって写本をそのまま写真複製したもの(影印本)一種とがある。

『増註唐賢絶句三体詩法』(『三体詩素隠抄』ともいう)はその刊本の中で唯一の全巻の抄であり、(雪)心素隠が釈をつけたものである。元和八年(1622)古活字本が初刊し、寛永十四年(1637)刊本が流布している。のち大正二年(1913)活版本がある。⁽¹⁾

『三体詩』の中で杜牧の18首が一番多い⁽²⁾が、それぞれ七言絶句16首と七言律詩2首がある。「貴池県亭子」はそれに収められた七言絶句で、また「題池州貴池亭」という題で『樊川集』『樊川詩集注』『全唐詩』などにも収録された。しかしながら、それにかかわる注釈は少なく、地名及びその歴史に重きを置いた傾向が見られたのである。その一方、抄物としての『三体詩素隠抄』は、日本人の釈者が筆を費やし、詩の意味解釈から詩人の逸話まで注釈してきたのである。

というわけで、本稿では、『三体詩素隠抄』におけるその色異なっている絶句か

(1) 村上哲見、『漢詩と日本人』、講談社選書メチエ、pp159-160

(2) 村上哲見、『漢詩と日本人』(講談社選書メチエ、pp199)では、「『三体詩』では杜牧の十七首が最も多い」と言ったが、筆者が実際に調べたところ、杜牧の詩は少なくとも十八首があったことが明らかになっている。それぞれ「江南春」「貴池県亭子」「秋思」「題宣州開元寺」「山行」「宮詞」「漢江」「醉後題僧院」「懷吳中馮秀才」「念昔遊」「過勤政樓」「將赴吳興登樂遊原」「鄭瓊協律」「赤壁」「秦淮」「題齊安城樓」「九日齊山登高」「題宣州開元寺水閣」なのである。

ら入手し、心素隠がその「貴池県亭子」における字、語をどう解釈し、理解したかを考察し、また引用された書籍、資料を解明していき、さらに漢詩に対するオリジナルな見解があるか否かもを探ってみたいと思う。

1. 「貴池県亭子」の詩題の変遷

前述の通り、「貴池県亭子」という題は『三体詩』及びその日本へ伝わっていった各種抄物⁽³⁾が採用されたものである。漢詩の審美から言えば、こういう詩題は中国漢詩であり見当たらず、少々変わっている例であろう。では、中国のほかの詩集で、この絶句の題はどうなるだろう。

表一 中国においてこの一首の詩題情况

	詩題	出典
i	題池州貴池亭	唐 杜牧『樊川集』樊川文集（第三），四部叢刊景明翻宋本
		唐 杜牧『樊川詩集注』詩集，卷三，清嘉慶德裕堂刻本
		宋 李昉『文苑英華』，卷三百十六，明刻本
		明 曹学佺『石倉歷代詩選』，卷七十五，晚唐二，清文淵閣四庫全書補配清文津閣四庫全書本
		清 曹寅『全唐詩』，卷五百二十二，清文淵閣四庫全書本
		清 汪繡『佩文齋詠物詩選』，卷一百十八亭類，清文淵閣四庫全書本
ii	貴池県亭子	宋 周弼『三体唐詩』，卷一，清文淵閣四庫全書本
iii	題貴池亭	宋 洪邁『萬首唐人絶句詩』，卷第二十五，明嘉靖刻本

表一は中国側でその絶句が収録された時、使われている詩題である。「題池州貴池亭」は圧倒的な比率を占めていることが分かってきた。また、『三体唐詩』の「貴池県亭子」のほか、『萬首唐人絶句詩』には「題貴池亭」というテーマも出てきたのである。それにもかかわらず、「題貴池亭」は「題池州貴池亭」を簡略的に記され、同じジャンルのものであるが、『三体唐詩』の詩題と違ったのである。ということで、そもそも『三体唐詩』に収められたこの『貴池県亭子』は異彩を放っている。

(3) 日本側の主な版本は以下の通りである。『三体詩素隠抄』雪心素隠，（刊年不明）000007294780 国立国会図書館 デジタルコレクション，『増註唐賢絶句三體詩法』宋周弼 撰，元釈円至 註，元裴庾 増註，含英堂明誠堂，享保3 [1718]，『増註唐賢絶句三體詩法』3巻，宋周弼 撰，正統1 [1436]

表二 「貴池県亭子」について諸版本の比較

日本側				中国側			
『三体詩素隠抄』[1]	『増註唐賢絶句三體詩法』[2]	『増註唐賢絶句三體詩法』[3]	『三体唐詩』[4]	『樊川集』[5]	『全唐詩』[6]	『樊川詩集注』[7]	
貴池県亭子	貴池縣亭子 題縣志其地在池州梁昭明太子以其魚鰓封貴池	貴池県亭子 題縣志其地在池州梁昭明太子以其魚鰓封貴池	貴池縣亭子 題縣志其地在池州梁昭明太子以其魚鰓封貴池	題池州貴池亭	題池州貴池亭	題池州貴池亭【緣起】池州望江亭在貴池縣南齊山一名貴池亭 九華山餘賢池亭俗呼望江亭 以其見大江可望淮康也 亦見九華通鑑	
勢北凌歊宋武臺	勢北凌歊宋武臺 遼盛見七重註	勢北凌歊宋武臺 遼盛見七重註	勢北凌歊宋武臺	勢北凌歊宋武臺	勢北凌歊宋武臺	勢北凌歊宋武臺【太平寰宇記】太平州壽遠縣黃山在縣西北五里有宋凌歊臺遼遼五里一百步高四十丈【入蜀記】游黃山登凌歊臺正如鳳皇閣花之類 韓因山顧名之宋高祖所營血勢星曜高出氛埃之表南望屏龍山九井道多如在几筵	
分明百里遠帆間	分明百里遠帆間	分明百里遠帆間	分明百里遠帆間	分明百里遠帆間	分明百里遠帆間	分明百里遠帆間【南齊書薛瑒傳】開運閣分明來【祖冲之傳】造千里船於新淦江賦之曰行百餘里【劉孝威詩】劃望於帆間	
蜀江雪浪西江滿	蜀江雪浪西江滿	蜀江雪浪西江滿	蜀江雪浪西江滿	蜀江雪浪西江滿	蜀江雪浪西江滿	蜀江雪浪西江滿一作起【元豐九歲志】峽州夷陵有蜀江【名勝記】岳陽志云湘江五月六月間其水漲則沙洲復滿湘湖漲爲之改色南至青草旬日乃復亦謂之西水其水極冷皆云峨嵋雪消所致居人間之斷流也	
強半春寒去卻來	強半春寒去卻來 增註 寒家以有金為強	強半春寒去卻來 增註 寒家以有金為強	強半春寒去却來	強半春寒去却來	強半春寒一作風去卻回	強半春寒一作風去卻來【蘇軾書成道集】陽朔二年春寒【張翥詩】且喜年華去復來	

[1] 『三体詩素隠抄』 雪心素隠, (刊年不明) 000007294780 国立国会図書館 デジタルコレクション

[2] 『増註唐賢絶句三體詩法』 3 卷・宋 周弼 撰, 正統 1 [1436]

[3] 『増註唐賢絶句三體詩法』 宋周弼 撰, 元釈門至 註, 元 裴庚 増註, 含英堂明誠堂, 享保 3 [1718]

[4] 『三体唐詩』 宋周弼 編, 元釈門至 註, 卷一, 清文淵閣四庫全書本

[5] 『樊川集』 唐杜牧, 樊川文集 (第三) 四部叢刊景明翻宋本

[6] 『全唐詩』 清曹寅, 卷五百二十二, 清文淵閣四庫全書本

[7] 『樊川詩集注』 唐杜牧詩, 集卷二, 清嘉慶德裕堂刻本

表から見ればわかるように、日本側の『三体詩』は「貴池県亭子」という詩題を持ち、いずれも『三体唐詩』の詩題をそのまま使われている。その一方、『樊川集』『全唐詩』『樊川詩集注』は「題池州貴池亭」という詩題を持つ。そして、『三体唐詩』では、「貴池県亭子」に対し、解釈は「郡県志貴池在池州 梁昭明太子 以其魚美 封貴池（郡県志により、貴池は池州に在り、梁昭の明太子は其の魚が美味しいことを以て、貴池を封じた）」という僅かな一文で終わっている。また、『樊川詩集注』という専門的な注釈書のほか、中国側の詩集ではどちらも注釈が少なく、注があっても個別の字に対し、そのほかの表記を紹介したに過ぎない。周弼の『三体唐詩』をもとに、できた日本側の抄物は『三体詩素隠抄』のほか、余計な注釈も見られず、千篇一律の感じがしている。『樊川詩集注』の注を見てみると、『一統志』（清、穆彰阿『（嘉慶）大清一統志』、地理誌）、『元豊九域志』（北宋、王存、地理総誌）、『名勝志』（『大明輿地名勝志』のことか、明、曹学佺、地理誌）、『太平寰宇記』（宋、中国地理誌史）のような地理誌のジャンル、『入蜀記』（南宋、陸游、長篇旅行記）のような地理誌の色彩を帯びた日記ジャンル、また『漢書・成帝紀』（後漢、班固、初の紀伝体断代史）、『南齊書・薛淵傳』（南朝梁、蕭子顯、紀伝体断代史）、「祖沖之傳」（『南齊書』の一篇）のような史書ジャンル、さらに南朝梁・劉孝威「帆渡吉陽洲詩」の「幸息榜人唱 聊望高帆開」や唐・張説「幽州新歲作」の「共知人事何嘗定 且喜年華去復來」の詩のジャンルといった幅広い分野のものがあ

しかしながら、いずれの地理誌、史書、詩を引用しても、注者自身はあたかも隠れているように、はっきり自分なりの意見を述べなかったのである。この点はまさに、のちほど考察しようとする『三体詩素隠抄』における「貴池県亭子」とずいぶん違ったのである。

2. 『三体詩素隠抄』における「貴池県亭子」

資料一は『三体詩素隠抄』における「貴池県の亭子」である。



資料一

訓読：

勢^{りょうかそう}いは凌^ぶ歊^{だい}宋^{ぶんめい}武^{そんはん}臺^{はん}に比^{はん}す、分^{ぶん}明^{めい}に百^{ひゃく}里^り遠^{えん}帆^{はん}開^{かい}く。

蜀^{しよくかう}江^{せつらう}の雪^{せう}浪^{らう}西^{せい}江^{かう}に満^{みつ}つ、強^{きやう}半^{はん}春^{しゅん}寒^{かん}去^さて却^{かへつ}て来^{きた}る。

3. 『三体詩素隠抄』における注釈と分析

資料二 歊下界ノ塵土ノ気也。本集七言注。歊ハ許驕ノ切。熱風也 字亦作焔 或云臺高可以凌滌暑氣。図経曰凌歊臺在太平州北黃山上。宋武帝南遊嘗登此臺。且建離宮。トアルソ。

(イ)まずは、「歊ハ許驕ノ切」の「許驕ノ切」は「反切」といい、いわゆる中国古代において、漢字の発音を示す方法のひとつである。2つの漢字を用い、一方の母音と、他方の子音および声調を組み合わせて、その漢字の音を表すのである。心素隠は中国のそのような表音法がマスターできていることから、彼は一定の漢詩文学の教養を持っていたことも垣間見えよう。

次に、釈者は「図経曰凌歊臺在太平州北黃山上」と言ったが、潘晟氏『「図経源流再討論」—中国地方志』の研究によると、「図経は一般に図と経とに分けられ、図は主に地方の土地、物産を描いたが、経は図の文字説明という機能を働いている。李吉甫の『元和郡県図志』になると、唐代の図経は図と経、両方とも備えておいたが、経の方が図よりずっと多かったし、ひいては主体となっていくた。」⁽⁴⁾という。この絶句の創作年代と『元和郡県図志』の影響から分析してみれば、ここでの「図経」はそれを指す可能性が高いと思われる。

資料三 詩ノ意ハ此ノ貴池縣ノ亭ハ高シテ、其ノ勢ガ。宋ノ武帝ノ。凌歊臺ニ。ヨク似タソ。此ノ亭ニ。登レバ。遠サ百里バカリ。アナタヘ行ク舟ノ帆ヲ開キタルガ。分明ニ。目前ニ見ルソ。舟人ノ。コトハニ。帆ヲ開クト云事ガアルソ。此ノ亭ハ。池州貴池縣ニ。アルホドニ。何サマ水邊ニ。アルト見ヘタソ。言ハ此ノ亭上ヨリ。見タレハ。ヨリフシ。二月ノ時分ニテ。蜀山ノ雪ガ。トケテ。其ノ雪シルガ。蜀江ノ。白浪ト。ナツテ。八千里ノ。江水カ。オシテ来タホトニ。西江ノ水モ。満テ。マツ白ニ。見ヘタソ。サルホトニ。雪ノ意ガ。アリテ。スサマジキイ気ガテキテ。アラ。サムヤト。ヲモウタレハ。半分スギバカリ去タル春寒ガ。トツテ。カヘシテ。又来ルソ。//却来ト書テ。和訓ニハ。サヘカエルト。ヨンタソ。洞家ノ唱ニテハ。却来ヲキヤライトヨムソ。

(四)資料三では、心素隠はまず漢詩の意味解釈を行い、貴池県の亭が高く、其の勢が宋の武宗の凌歊臺によく似ていた。舟人が杜牧に「百里ばかり遠方から行く舟の帆を開いたことがはっきり見えるよ」と教えた。此の亭は池州貴池県にあるので、杜牧はきっと川端で誰かと出会い、その人の言葉によると、「二月頃、この亭子の上から見れば、蜀山の雪は溶けてしまい、その雪汁が蜀江の白波となった。八千里の江水は押してきて、西江の水が満ちてしまつて、真っ白に見えた。雪のせいで、凄まじいだろうと思ったところ、半分過ぎばかり去った春の寒気は返してまた来るぞ」という。その続き、「却来」にかんする訓読の方法についても、「和訓」では「さえかえる」と読み、洞家では「きやらい」と読んでいたと説明して

(4) 『図経源流再討論』—中国地方志』、潘晟 (2010)、Chinese Local Records, 1号、pp1から抜粋。筆者訳。

きた。ここでの「洞家」は「禅宗の一派曹洞宗⁽⁵⁾」なのである。

資料四 雪浪ヲバ。賊黨ニ比シタソ。雪浪ハ。白浪ヂヤホトニソ。風フケバ
オキツシラナミタツタ山。夜半ニヤ君ガヒトリ行クラント。ヨメルモ。シラ
ナミハ山賊ヲサシテ云ソ。(中略) 愚謂此ノ詩ノ三四謂會昌ノ乱之餘黨再起。
乎雪浪ハ。白浪也。白浪謂賊也。賊ハ小人也。以雪霜。比小人。之例古来有
之。是以雪浪比賊也。春寒ハ以比利氣。去却来者謂賊黨。已退散後比其ノ餘
黨再起乱也。

(い)心素隱の考え方によると、「雪浪というものが賊党に比したのである。雪浪は白浪のそのものである。(中略)それで、シラナミは山賊を指して言ったぞ。」また、自分の論点を支えるため、和歌も引用した。「風吹けば 沖つ白波 竜田山 夜半にや君が ひとりこゆらむ」⁽⁶⁾ (『古今和歌集』)。この女が男に詠んだ和歌の中で「白波」というものが出てきたが、「白波」は盗賊の異名と指摘された。筆者が『後漢書』を調べてみたところ、心素隱がつけた注釈と幾つの箇所似ている。

表三 「貴池県亭子」の注と『後漢書・靈帝紀』の比較

「貴池県亭子」の注	『後漢書・靈帝紀』 ⁽⁷⁾
(前略) 二月ノ時分ニテ。(中略) 雪浪ヲバ。賊黨ニ比シタソ。雪浪ハ。白浪ヂヤホトニソ。(中略) シラナミハ山賊ヲサシテ云ソ。(後略)	(前略) 二月有星孛于紫宮，黃巾餘賊郭太等起於西河白波谷。寇太原、河東。
	(中略) 九月，南單于叛。與白波賊寇河東。遣中郎將孟益率騎都尉公孫瓚討漁陽賊張純等。
愚謂此ノ詩ノ三四謂會昌ノ乱之餘黨再起。乎雪浪ハ。白浪也。白浪謂賊也。(中略) 是以雪浪比賊也。春寒ハ以比利氣。去却来者謂賊黨。已退散後比其ノ餘黨再起乱也。	冬十月青、徐、黃巾復起，寇郡縣。(後略)

(注：似ているところは傍線で示しておいた)

[1]『後漢書』南北朝 范曄，卷五十八，虞傳蓋臧列傳第四十八，百衲本景宋紹熙刻本

(5) 日本の曹洞宗は鎌倉時代道元から始まった。中国曹洞宗の「只管打坐」の禅風を日本にもたらし、また「修証一如」の参禅方法を主張した。(韓立紅『日本文学概論』，南開大学出版社，2012，pp123)

(6)『古今和歌集』，卷一八・雑歌下・九四四，読み人知らず，小学館，1994，pp375
訳は「風は吹くと沖の白波が立つ、その「たつ」を名に持つ竜田山を、この夜中にあなたは一人寂しく越えているのでしょうか。」

表を見れば、一目瞭然かと思われる。この絶句にそもそも具体的な月を言わなかったのに、なぜ心素隠はわざと「二月ノ時分ニテ」と書いただろう。それは、中国の『後漢書』には、「二月には、黄巾の残党郭太等が西河の白波谷で蜂起した」という一文が書かれたのではないだろう。この地名の「西河」は絶句の中の「西江」に対応し、「雪浪」は「白波谷」と対応しているのである。また、『後漢書』では、「白波賊」という名で「黄巾」を呼び、「冬の十月にまた蜂起してしまった」という記録が載っていた。それゆえ、心素隠は「雪浪」から「白波」へ、また「白波」から「白波賊」、さらに「白波賊」から「黄巾の残党」、最後に「黄巾が再び蜂起した」まで連想してしまったのである。ということで、心素隠は確かに頭を巡らし、多様な知識を駆使し、自分ならではの注釈を綴ったのである。その解釈こそ興味深いユニークな論点ではあるまいかと思われる。

その上、この一首の絶句から、和歌まで引用できたことは、心素隠はさすがに知識の豊富な人物だと思われる。それにもかかわらず、漢詩への注釈である以上、中国漢詩文における「雪浪」の意味を精確に理解できたかどうかは肝心要なのではないかと考えられる。

それゆえ、筆者は中国の漢詩文における「雪浪」について、調べてみた。

中国側の「雪浪」に関する用例を探してみると、唐以前は其の姿が見られず、唐からごく普通のイメージとして、多用されていった。筆者が調べた結果、大まかに以下の三つの意味が挙げられる。

① 白い波のことを指す。

表四 「白い波」という意味の用例

	時代・作者・詩題	内容	出典	分析
一	唐 元稹 「遭風二十韻」	俄驚四面雲屏合、 坐見千峯雪浪堆。	『元氏長慶集』，元氏 長慶集，卷第十九， 四部叢刊景明嘉靖本	杜牧と比べ、少々先の詩人であった。 荒れた時、雲が四方から集まり、高 波が峰へ押し寄せてきた一シーンを 描いた。ここでの「雪浪」はやはり浪 を指している。杜牧はそれに響いた 可能性もあっただろう。
二	唐 白居易 「東樓南望八韻」	鷁帶雲帆動、 鷗和雪浪鱗。	『白氏長慶集』，白氏 文集卷第二十，四部 叢刊景日本翻宋大字 本	カモメは雪波とともに飛んでいる。 カモメと掛かり、波のことを書かれ た。
三	唐 李商隱 「送崔珏往西川」	一條雪浪吼巫峽、 千里火雲燒益州。	『李義山詩集』，唐李 義山詩集卷之五，四 部叢刊景明嘉靖本	ここでの「雪浪」を「一條」で数えた ことから、川のようなものを形容し ようとした意欲が表れる。また、巫 峽という地名から、この「雪浪」の川 は長江であることが分かってきた。

四	唐 温庭筠 「送盧處士遊吳越」	試逐魚舟看雪浪， 幾多江燕荇花開。	『温庭筠詩集』別集， 四部叢刊景清述古堂 鈔本	「魚」「江」と対応し、ここでの「雪浪」は白い浪のことかと思われる。
五	五代 韋穀 「登凌歊臺」	高臺今古境長閑， 因想興亡自慘顏。 四海已歸新雨露， 六朝空謁舊江山。 嵯峨獨鳥沙汀畔， 風遞連橋雪浪間。 好是輪蹄來往便， 誰人不向此躋攀。	『才調集』，卷八，古 律雜歌詩一百首，四 部叢刊景清錢曾述古 堂景宋鈔本	「凌歊臺」「雪浪」というキーワードが出た上で、六朝の興亡に対し、感慨無量な気持ちを表している。詩人は高いところに登り、以前の王朝を惜しみながら、その浪が立っている景色も描いた。
六	宋 王邁 「次韻蘇翰林西山詩」	西江雪浪接溪國， 巨石森起繁如堆。	『清江三孔集』，卷 六，清文淵閣四庫全 書補配清文津閣四庫 全書本	「西江」「雪浪」という二語が出てきて、杜牧の影響を受けたのか。
七	宋 範成大 「湘江洲尾快風挂帆」	船頭雪浪吼奔雷， 十丈高帆滿意開。	『石湖詩集』石湖居 士詩集，卷十三，四 部叢刊景清愛汝堂本	「船頭」「帆」とテーマの「湘江」から見れば、「雪浪」はつまり白い浪のことである。
八	宋 範成大 「題夫差廟」	縱敵稽山禍已胎， 垂涎上國更荒哉。 不知養虎自遺患， 只道求魚無後災。 夢見梧桐生後園， 眼看麋鹿上高臺。 千齡只有忠臣恨， 化作濤江雪浪堆。	『石湖詩集』石湖居 士詩集，卷二十八， 四部叢刊景清愛汝堂 本	色異なった一首であるが、風刺と皮肉を込めた作品であろう。「千年という年でありながら、忠臣しか恨まならず、川の白波と化す」という意味で、雪浪はどうしてもただの「白波」ではないようである。
九	宋 劉克莊 「題江貫道山水十絶」その七	半夜黃天蕩， 樓船雪浪中。 當年草檄客， 今日負樵翁。	『後村集』卷十三， 四部叢刊景舊鈔本	「船」とかかった。
十	宋 楊萬里 「過鷺塘渡」	雪浪無堅岸， 金沙有退痕。	『誠齋集』誠齋集， 卷第十三，四部叢刊 景宋寫本	「岸」とかかった。
十一	金 李俊民 「水簾」	倒傾蛟室瀉瓊瑰， 派落空巖雪浪堆。	『莊靖集』，卷四，舊 鈔本	「蛟」「瀉」、そして題の「水簾」とかかった。
十二	元 陳基 「江月樓」	雪浪逶迤三峡至， 露華偏裊九霄多。	『夷白齋稿』夷白齋 藁外集，四部叢刊三 編景明鈔本	「三峡」から、長江のことが推測できよう。
十三	明 胡應麟 「同茅平仲登甘露寺絕頂作」	千山雪浪吹樓殿， 萬里雲帆下舳艫。	『少室山房集』卷五， 十七言律詩，七十九 首，清文淵閣四庫全 書補配清文津閣四庫 全書本	「雲」「帆」「舳艫」は水とかかった。
十四	明 鄭善夫 「蜀中歌」其の六	雲濤雪浪通牛渚， 杳杳飛檣漢漢行。	『少谷集』卷九，文 淵閣四庫全書補配清 文津閣四庫全書本	「牛渚」は長江の要塞であり、兵事で必ず奪おうとする要地である。「雲」「濤」「渚」とかかった。

唐から明までの代表的な詩人が作った詩文を選び取った。以上の「雪浪」は全部「白い浪」との意味で、いつも「雲」「帆」「舟」「峽」「江」とかかりながら、出てくる。用例数からみると分かるように、「白い浪」は一番多く使われた意味である。

②お茶の水、また白湯のことを指す。

表五 「お茶の水、白湯」という意味の用例

	時代・作者・詩題	内容	出典	分析
一	宋 黄庭堅 「次韻李任道晩 飲鎖江亭」	西來雪浪如皤烹， 兩崖一葦乃可橫。 忽思鍾陵江十里， 白蘋風起縠紋生。 酒杯未覺浮蟻滑， 茶鼎已作蒼蠅鳴。 歸時共須落日盡， 亦嫌持盞僕屢更。	『豫章黃先生文集』 豫章黃先生文集第 六，四部叢刊景宋乾 道刊本	茶のことを詩の内容と詩題からはっきり見える。白い浪はまさに茶の水が沸騰している時に似ているがゆえ、それを借りて白い茶の水を形容していたのであろう。
二	宋 黄庭堅 「西江月茶」	已醺浮蟻嫩鵝黃， 想見翻成雪浪。	『山谷琴趣外篇』卷 三，四部叢刊三編景 宋本	
三	明 貢修齡 「試新茶」	雪浪乍浮光激灑， 篆烟鳬寫碧氤氳。	『斗酒堂集』卷一詩， 明末刻本	「雪浪」を茶に比喻する考え方は黄庭堅からヒントを得た可能性もあっただろう。

黄庭堅がそういう意味の創作者であろう。その影響を受け、後代の詩人も「雪浪」を持ち、「茶の水」を喩えていた。

③雪浪石のことを指す。

表六 「雪浪石」という意味の用例

	時代・作者・詩題	内容	出典	分析
一	宋 蘇軾 「雪浪齋銘并引」	予於中山後園得 黑石，白脉，如 蜀孫位、孫知微 所畫石間奔流， 盡水之變。又得 白石曲陽，為大 盆以盛之，激水 其上，名其室曰 雪浪齋云。	『蘇文忠公全集』東坡 後集，卷八，明成化 本	蘇軾は奇石に執着を持っていた。元祐八年（1093）、彼は定州知事を務め、中山の裏庭にある黒地白脈の石が手に入った。その後、自分の書齋をも「雪浪齋」と名づけた。
二	宋 蘇軾 「雪浪石」	畫師爭摹雪浪勢， 天工不見雷斧痕。	『蘇文忠公全集』東坡 後集卷三，明成化本	蘇軾も「雪浪」のため、詩も作った。この一句は奇石の模様の多変に富んでいた天然の芸術性を讃えたのである。

分析の中に書いてあるように、3番目の「雪浪」は「雪浪石」の略語で、蘇軾の愛物を特に指していたのである。

以上の例を持ちながら、中国側の「雪浪」に関する詩文の用例はどうしても「山賊」「余党」と結びつけかねるのである。心素隱はそれに関わる解釈は中国主流の観念では成り立っていないことが窺われる。

資料五 杜牧年代以才子傳并和漢合図。考之 太和 開成 會昌 太中之間人也。太和ハ文宗ノ年號也。九年改元開成。五年文宗崩ス。武宗即位 改元會昌。武宗惡戾如桀紂。毀去釋道二教。故天下大亂。此亂事見和漢合図。會昌六年。武宗崩ス。宣宗即位。改元大中。//杜牧太和二年榜進士。大和末往湖州。目一女子方十余歳。約以十年後 吾來典郡 當納之 泊周墀入相。上牋乞守湖州。比至已十四年。此年凡ソ當大中二年。(中略)此ノ詩ハ。牧ガ湖州ノ守ニ。ナツテ行時。池州透ルトキ。貴池縣ノ亭ニ。上テ題シタソ。

(二)資料五の注釈は杜牧の年代をも考察している。「才子傳」は『唐才子傳』のことを指していたが、その内容は「牧字牧之 京兆人也 善屬文 太和二年韋籌榜士(中略)太和末往湖州 目成一女子 方十餘歳 約以十年後 吾來典郡 當納之 結以金幣 泊周墀入相 上牋乞守湖州 比至 已十四年(牧は字が牧之で、京兆の人だった。文章を綴ることが上手かった。太和二年、韋籌と同じ榜の進士だった。(中略)太和末、湖州へ行った時、ある女の子を見かけ、ちょうど十歳余りという年だった。十年後、我は郡を掌る時、あなたをめとろうと金貨を以って約束を結んだ。周墀が入朝し、宰相となった時、奏上し、湖州の守をいただくことを乞った。湖州に至ったまで十四年も経てしまったのだった。筆者訳)」という筋である。『三体詩素隱抄』の注と比べてみると、内容はほぼ同じだということが分かった。もっと微妙な区別は表七で示す。

表七 『三体詩素隱抄』と『唐才子傳』の内容対比

『三体詩素隱抄』	『唐才子傳』
杜牧太和二年榜進士。	牧 字牧之 京兆人也 善屬文 太和二年韋籌榜士
大和末往湖州。目一女子方十余歳。約以十年後 吾來典郡 當納之 泊(ヲヨンテ)周墀入相。上牋乞守湖州。比至已十四年。	(中略)太和末往湖州 目成一女子方十餘歳 約以十年後 吾來典郡 當納之 結以金幣 泊周墀入相 上牋乞守湖州 比至 已十四年

(注：相違したところは傍線で示しておいた)

そして、素隠も武宗のことを言及した。説によると、「武宗惡戾如桀紂。毀去釋道二教。故天下大亂（武宗は凶暴残忍で、まるで桀紂の如し。彼は釋道の二教を毀し去り、その故天下が大いに乱れてしまった）」。素隠は『和漢合図』に武宗年間の会昌の乱を記録したと言われたが、山下哲郎の「年代記の中の伝承—『和漢合符』『和漢合図拔萃』等をめぐって」⁽⁷⁾では「和漢（天竺を含む）対照的な年代記はいわゆる「合運（図）」であり、和漢対照のものと日本の年代記に中国年代記を割りこませたものに分けられた」とされている。年代記の概念は山下氏が文章の先頭に置き、「和漢の皇統、王系を年表形式で示した一群の書を指す」というのである。それらを参考にして、『和漢合図』は日本と中国の年表を対照的に記された書であるという性格が窺える。それゆえ、心素隠はその詩の創作時期が太中二年と推測した。

4. 結論

「貴池県亭子」は中国の『三体唐詩』には特に説明がなかった。そのほかの詩集や詩集注では地名の歴史や漢字を訂正することに集中し、本詩の意味と詩人が表そうとした感情をそれほど綴らなかった。それと比較し、日本側の『三体詩素隠抄』の注釈を分析し、以下のことが分かってきた。(一) 中国学者が漢詩を解釈した時使った方法を利用した。例えば、敵について、意味と音韻から考察してみた。また、詳しく句ごとに意味解釈し、場合によっていくつかの訓読法も紹介してきた。心素隠の漢文学教養もこの点から明らかとなった。さらに、「白浪」との解釈で『古今和歌集』から和歌を引用し、自分の見解を支えたことから、心素隠は一定の和文学素養も身に着けた。(二) 詩人の年代と漢詩の創作背景を中国と日本、両方の書籍を通し、一一確認したことからみると、考証の綿密が分かった。(三) 杜牧の逸話がふくまれ、確かな生没年を推測し、武宗年間の「会昌の乱」をこの絶句の創作背景にかかわらせた考え方が少し読みすぎたかもしれないが、漢詩の時代背景から詩の意味を考察した思惟方式は認めるべきかと考えられる。(四) 「白浪」を「山賊」、詩の三四句が会昌の乱の残党が再び蜂起したと解釈した発想はまるで中国の注釈で見当たらず、独創性を持つものだと思われる。しかし

(7) 「年代記の中の伝承—『和漢合符』『和漢合図拔萃』等をめぐって」, 山下哲郎, 伝承文学研究, 1998

ながら、中国側の用例を調査してみると、このような考え方は誤読になったようである。

参考文献

- [1] 『樊川集』唐 杜牧，樊川文集，第三，四部叢刊景明翻宋本
- [2] 『後漢書』南北朝 范曄，虞傳蓋臧列傳，第四十八，百衲本景宋紹熙刻本
- [3] 『増註唐賢絶句三體詩法』宋 周弼 撰，正統1 [1436]
- [4] 『増註唐賢絶句三體詩法』宋 周弼 撰，元 釈円至 註，元 裴庾 増註，含英堂明誠堂，享保3 [1718]
- [5] 『三体詩素隠抄』雪心素隠，（刊年不明），国立国会図書館デジタルコレクション
- [6] 『三体唐詩』宋 周弼編、元 釈円至注，清 文淵閣四庫全書本
- [7] 『全唐詩』清 曹寅，清 文淵閣四庫全書本
- [8] 『樊川詩集注』唐 杜牧詩，清 馮梧注，清 嘉慶德裕堂刻本
- [9] 『唐才子傳』元 辛文房，清 佚存叢書本
- [10] 『古今和歌集・新編日本古典全集』，小沢正夫、松田成穂校注・訳，小学館，1994
- [11] 『漢詩と日本人』，村上哲見，講談社選書メチエ，1994
- [12] 「年代記の中の伝承—『和漢合符』『和漢合図抜萃』等をめぐって」，山下哲郎，伝承文学研究，1998
- [13] 『日本文化概論』，韓立紅，南開大学出版社，2002
- [14] 『「図経源流再討論」—中国地方志』，潘晟，Chinese Local Records，1号，2010